

『ベートーヴェンの生涯』片山敏彦訳

二〇一六年六月二十五日（土）午後二時—四時 作成 清原章夫

今月の音楽

- 一・ベートーヴェン（独・一七七〇—一八二七年） 序曲『コリオラン』 作品六一
- （二）演奏 ハイנטツ・レーグナー…指揮 ベルリン放送交響楽団 録音…一九八二年一月
- （二）曲目解説 ベートーヴェンの友人で、ウィーンの宮廷秘書官を務め、また法律家で詩人でもあったハインリッヒ・ヨーゼフ・フォン・コリン（一七七一—一八一一年）の同名の、古代ローマの英雄コリオランを主人公にした戯曲に触発されて一八〇七年に作曲された。コリオランは、ブルータコス「英雄伝」に登場するローマの英雄で、政治的な対立から国外追放となったコリオランは、隣国の将軍となり大軍とともにローマに攻め寄せるが、母と妻の忠告で再び祖国側についたので殺されてしまうという悲劇的なものである。曲はコリンに献呈された。

二・ベートーヴェン 交響曲第七番イ長調 作品九二 第二楽章アレグレット

（二）演奏 レナード・バーンスタイン…指揮 ニューヨーク・フィルハーモニック
録音…一九六四年

- （二）曲目解説 ロランは、『ベートーヴェンの生涯』でこの曲について以下のように述べている。「この時期に（一八一二年）『第七』と『第八』の交響曲が、テプリッツ滞在中に数カ月間に書かれた。『第七』は「律動の大饗宴」であり、『第八』は軽快なユーモラスな気分の交響する作品である。この両作品にはおそらく最も自然な、（彼自身のいったとおり）「ボタンをはずしている」aufgeklopft 飾り気無い素地が現われている。そこには夢中な陽気さと狂熱とがあり、気分が突如たる対照があり、錯雑する、大規模な、電光のような思いつきと巨人的な爆発とがある、これらはゲーテとツェルターとに恐怖を感じさせたところの特徴である。北ドイツでは『第七』は酔っぱらいの作品だと評された。——確かに酔っぱらいには相違ない、ただし自己の天才の実力に酔っているのである。彼は自分自身についていった——「俺は人類のために精妙な葡萄酒を醸す酒神（バッカス）だ。精神の神々しい酔い心地を人々に与える者はこの俺だ。」ベートーヴェンが第七交響曲の終曲でディオニソスの祝典を描写しようとしたと書いているヴァーグナーの説が正しいかどうか私は知らない。私自身はむしろ、この激しいオランダ的祝祭ケルメスの中に、彼のフランドル的血統の印を認める。——訓練と服従との国において、誇らしげにあらゆる額縁からはみ出してしまうような彼の表現と動作との大胆さの中に私が彼のこの血統の特徴を認めるのと同様に。しかも、この『第七交響曲』の中には他の作に類例がないほどに率直で自由な力が現われているのである。それは超人的精力の無方途な濫費——濫費の楽しみである。横溢し氾濫する大河の楽しみである。」（『ベートーヴェンの生涯』片山敏彦訳 岩波文庫 四五頁）
- この第二楽章は、初演時に聴衆からアンコールされ、ワーグナーはこの楽章をさして「不滅のアレグレット」と呼んだ。葬送行進曲風のリズムをもつ極めて単純な旋律で、一音の無駄もなく一音の不足もない。ベートーヴェンの音楽の中でも最も美しいものの一つ。

三、ベートーヴェン 交響曲第五番ハ短調 作品六七 第一楽章 第四楽章

(一)演奏 ヘルマン・シエルヘン・指揮 ルガノ放送管弦楽団 録音…一九六五年

(二)曲目解説 ユニテ二十五号(一九九八年三月刊)に、『わが青春と一生―ロマン・ロランと人生観』というタイトルの講演録が掲載してある。お話しされたのは、今年の一月に、八十七歳で惜しくも亡くなられた、元NHK交響楽団コンサートマスターで京都市立芸術大名誉教授、バイオリニストの岩淵龍太郎(いわぶち・りゅうたろう)氏である。

ここで、岩淵氏は、ロランの『ベートーヴェンの生涯』と『第五交響曲』に関して、素晴らしい解説をされているので、少し長くなるが紹介させていただく。

まず、片山敏彦先生との出会いが述べられている。「それで、さつき申しましたように昭和十八年、一九四三年に旧制一高に入りましたところ、第二外国語の担当教官が片山敏彦先生でした。ずいぶん贅沢な話ですが、第二外国語のドイツ語を片山先生にというこれが、私が意識的にロマン・ロランという人物と作品を、そして、ロマン・ロランの存在を心の奥深くに印象づけられる、時間的には第一の契機にありました。(中略)ロマン・ロランの『ベートーヴェンの生涯』と、『ヴィ・ド・ベートーヴェン』を日本語で訳して生涯というとか伝記のような感じがしますので、ほんとはちがうのじゃないかと、ベートーヴェンが生きている、それがあるのではないかというふうに、当時から思っておりました。それで、ロマン・ロラン自身がベートーヴェンを借り、またベートーヴェンの魂がロマン・ロランに乗り移り、そしてそれを吸収するだけの、乗り移って自分のものとして表現するだけの、すばらしい天才性をもつた文筆家でした。(中略)

どうして、苦難が突然歓喜になるのだと、これはあくまで精神論としてとらえられておりますので、私は音楽の和声の構造からそれはこういう意味を持っていますということをぜひ聴いていただきたいと存じます。

例えば、典型的な有名な例ですが、日本では「運命」と呼ばれております、ハ短調シンフォニー、第五交響曲ですね。あの時分にはベートーヴェンの耳の病気がいよいよそう隠しおせないようなことになって、文字どおり“Leiden”でありまして、つまり苦難であったと思いません。日々、苦難の生活を送っております。ベートーヴェンのハ短調というのは非常にすばらしく、そういう苦難の表現に適した調性でして、その苦難がどうしても歓喜に行かなければならないような、音の取り扱いをしております。それは第三楽章の一番最後の部分から(スケルツォと申しますけれども)、その最後の部分から瀏唳(りゅうりょう)たるトランペットの吹奏の時に、ハ短調が突如としてハ長調になるのです。これがベートーヴェンがわりあいに、乱用はしておりませんが、肝心の時に使っております。つまり、悩みの方は現実なのでして、ハ長調の方は理想と申しますか、現実には非常に悩みと苦しみと苦痛との人生ではあるけれども、そのハ長調の部分は喜びをもって、生き生きとですね、ヴィボです、それこそラ・ヴィということかもしれません。そういうものでなければならぬと、ねばならないという、倫理的な必然性でも申し上げましょうか、ベートーヴェンという人は非常に、モラルと言うとちよっと堅苦しいですが、同じ事ではございますがギリシャ語ではエトスと申しますか、エトスとパトスが非常に豊富な作曲家の一人であろうかと思えます。いわゆる倫理的にハ長調というもの、人生は断固ポジティブに生きなければならぬと、そしてそれをまた自らの喜びにするというような手法をとってハ短調交響曲の第四楽章がハ長調にすることで結ばれておりますので、これは大変な音楽的な効果にもなりまして、それが皆様の心を揺り動かすと、ですからハ短調だけでありますと、もちろん緩徐楽章は変ロ長調でハ短調と近い調子でございますが、ハ短調とハ長調というのはとてつもなく遠い調性なのです。『ユニテ二五』

